

星の王子さまとバオバブの木

『星の王子さま』は、純粹で優しく、愛があり、そして孤独なのです。

小さな、小さな星で、3つの火山と一本の薔薇の世話をしながら、暮らしていましたが、我儘で何かと注文の多い薔薇に愛想を尽かし、旅に出ます。

6つの星を訪れ、6人の大人と次々に出会います。

メンツが大事、支配と命令が好きな「王様」

ともかく、感心されたい「うぬぼれ男」

酒を飲んで忘れたい、それでいて酒を飲むのが恥ずかしい「呑み助」

星を5億所有していても、もっと金持ちになりたい「実業家」

一日に何度も繰り返し街燈に火を灯す「点燈夫」（日に1,440度も日が沈むため）

探検家から聞くだけで本を書く「地理学者」

そして、最後、7番目に訪れたのが我が地球であり、サハラ砂漠であり、そこで出会ったのが、偶々不時着していた若い飛行士です。

飛行士との話の中でも星の心配をし、キツネに会って、心で見ることの重要性、この世のキマリの重要性を教えられます。

「心で見なくちゃ、物事はよく見えないってことさ。肝心なことは目に見えない」

「星があんなに美しいのも、目に見えない花が一つあるからなんだよ」

「めんどろを見た相手には、何時までも責任があるんだ。守らなきゃならないんだよ、薔薇の花との約束をね」

そして、毒蛇の助けを得て、愛する薔薇のいる星に戻ってゆくというお話です。

出典：サン＝テグジュペリ作 内藤 濯訳『星の王子さま』岩波書店

作者（1900-1944）は、コルシカ島沖で愛機とともに行方不明になったそうです。

当時（1940年ごろか）の地球には、111人の王様と20億人の大人がいたということですから、子供を入れても30億人というところでしょうか。今と較べれば、地球は広く、美しく、ゆったりとしていたとは思いますが。

地球は変わっても、大人は本質的に現在と変わっていないようです。むしろ、もっと、人間の質は落ち、劣化しているようにも思えます。王子が地球に来る前に会った大人達、その大人達が持っていた特徴を重ね持った人が多いように見えます。

そんなに何層にも心が曇っては、真実は見えないでしょうし、見えたとしても真実かどうか判断できないでしょう。

物事の表面しか見ない、短絡的な発想、無責任・誠意が無い行動や無関心が地球を蔓延っているようです。そんな世の中では、知らず知らずの内にバオバブの木が大きく育ちすぎ、取り返しのつかないことになってしまいます。

実際のバオバブの木はマダガスカルの巨木ですが、この寓話では、放っておくと巨大化し、星を覆いつくし、星を壊してしまうようなとんでもない植物として描かれています。想像して下さい。直径 10m位の星に 10m 位の巨木が 3 本も立っている姿を。(この数字に根拠がありません。)

この「星の王子さま」が書かれたのは、第 2 次世界大戦の前か、最中だと推測されます。バオバブって大きなバブル崩壊、恐慌や戦争の種のことだと思われませんか。